

イワクラと日本の古史古伝との

繋がりに関する考察

理事 前田 豊

1. はじめに

日本の古代を記述する史書は、西暦8世紀の初期に作られた記紀「古事記」と「日本書紀」が最初だと伝えられている。そして、記紀神話の中には、イワクラのことが記載されている。例えば、サノオ神の乱暴が目にあつたとき、アマテラス大神は「天の岩屋戸」に籠っているし、ニニギ孫の天降りの出発点は「天の石位（イワクラ）」である。つまり、日本の国の始まりに、イワクラが大きく関係していることが分かる。

しかし、上記両書は、時の天皇家の史書であり、勝者の作成した書物であるため、史実は、政権にとって、都合のよいように変更されたり抹殺されたりして、必ずしも本当の日本の史実を記録しているわけではないとの見解が広まっている。

一方、それを補い、代わる史書があるかという点、「先代旧事本

紀」や「上記（うえつふみ）」の他、「竹内文書」、「富士古文献（宮下文書）」、「九鬼文書」、「秀真伝」、「物部文書」、「先代旧事本紀大成経」、「東日流外三郡誌」などが存在する。¹⁾ だが、アカデミズムの文献批判によつて、いずれも偽書との烙印が押され、歴史学会からは、無視ないし、敬遠されているのが実情である。

ところで、本発表者はイワクラ学会会報15号に、「イワクラに関する秦氏視点からの考察」という論文を投稿している。その中で弥生時代に不老不死の霊薬を求めて、日本列島に渡来した徐福一行が、秦氏の先発隊と考えられること、そして彼らは、古代イスラエルの石工技術者集団含み、列島各地に祭祀用イワクラを建設してきた可能性を指摘した。

また、最近の徐福研究の進展によつて、富士古文献と徐福の関係が明らかにされてきており、物部氏と徐福の間にも大きな繋がりがあることが判明しつつある。そこで、日本の種々の「古史古伝」

と物部氏・徐福集団の関係を洗い出してみると、驚くべき結論が導かれることが判明した。本報告では、日本の古史古伝と石工集団・徐福集団との関係について、考察してみる。

2. 徐福集団の日本列島での広がり

徐福一行は、秦始皇帝の命を受けて、不老不死の霊薬を求めて、大船団を組んで渡海し、日本列島に到着したと思われる。徐福一行は、九州に上陸し、佐賀に第一の拠点を築いたあと、本体は人数を絞りながら、瀬戸内海を渡り、太平洋側にでて、紀伊熊野に上陸した。紀伊半島は、徐福集団の第二の拠点であろう。彼らは紀伊熊野を拠点に探索を進め、三河湾に入り、東三河に第三の拠点を築いたあと、遠州から駿河を経て、富士山麓に最終拠点を築いたと考えられる。彼らの中には、伊豆半島に上陸したり、伊豆諸島の八丈島に

拠点築いた小グループもいたであらう。

九州からの発進に際して、日本海側に進行したグループもある。

彼らは、出雲や丹後半島で上陸し、拠点作りを行った上、秋田男鹿半島や青森の小泊に定着して、それぞれの地で徐福伝承を残した。更に、一部は北海道小樽フゴツペ遺跡などにも足跡を残したものと思われる。

富士山麓に住みついた、徐福集団の主流は、富士山西麓に拠点を築いたが、当時、日本の古代王朝が存在した北麓に移動したと思われる。ここで、日本の高天原の世を築くが、その子孫は富士山麓での、しばしば噴火する環境を嫌って、西の三河や東の相模に移動して行ったと思われる。そして関東から、東北地方にも広がって行ったことが考えられる。

神奈川県丹沢山系や秦野に、徐福一行が霊薬を求めて来訪し、定着帰化したという伝承があり、藤沢市には、徐福の子孫・秦氏が福岡氏を名乗って住んでいたと彫

られた墓碑が存在する。

3. 日本の「古史古伝」と徐福をつなぐ秦氏

秦氏の由来は、様々の説がある。最も古い説では、徐福一行が、秦氏を称したということが、古史古伝の一つである「富士古文献」で伝えられている。

徐福の先祖は、系図的には秦始皇帝の先祖と同一人物になっている。始皇帝は、その一族も含めて、中国西域の出身であり、生まれ地の秦を姓とし、秦氏を名乗ったと思われる。当時のローマ帝国は大秦であり、中国大陸を統一した始皇帝は、秦を国名とした。秦国には、中央アジアの古代国家シユメールやペルシャ、古代イストラエル等の歴史を背負った人々がかかり含まれていたと考えられる。かれらは、徐福集団を構成し、日本列島に到着した。そして、多

神教、一神教、仏教、道教、儒教を含む雑多な信仰を持っていたため、それらを統一することは難しかったと思われる。そこで、日本列島では、八百萬の神々が調和して存在する古神道を形成していったものと思われる。

4. 日本の古史古伝に共通するもの

日本の古史古伝としては、「竹内文書」、「富士古文献(宮下文書)」、「九鬼文書」、「物部文書」、「秀真伝」、「三笠紀」、「先代旧事本紀」、「上記(うえつふみ)」、「先代旧事本紀大成経」、「東日流外三郡誌」、「カタカムナ文書」、「契丹古伝」などがある。

この中、近世に成立したとされる「先代旧事本紀大成経」、「東日流外三郡誌」と近代に満州で発見された「契丹古伝」を除く諸文献は、「古事記」以前の書と呼ばれているが、残りの文献にも、「古事記」以前の内容が含まれている。

これらの書にほぼ共通しているのは、殆どが古代の政治闘争に敗れた豪族の家系に密かに伝えられた古文書であるということである。記録された文字は、「神代文字」によって書かれている例が多く、後の時代の人々が読めるように、漢文または漢字仮名まじりに書き改められたという。アカデミズムは、神代文字の存在を否定しているため、神代文字で書かれていたというだけで、古史古伝は「偽書」と断じられる大きな決め手になっている。しかし、古い神社や巨石に神代文字で記録された文字やペトログラフが残っており、神代文字の存在を完全に否定することはできないと考えられる。

また、古史古伝に記されている歴史は、「記紀(古事記・日本書紀)」が伝えるものと大きく異なっている場合がある。そこには、宇宙創成の時代から、神々が地球に降臨する時代、アマテラスやスサノオといった神々が地球全土を統治していた時代、ウガヤフキアエズの50―73代にわたる長い、前天

皇の時代の話がある。

ただ、その古伝の編者を尋ねると、秦氏が関与してくるようである。賀茂氏は秦氏の分族であるが、最近、月刊ムー2009年7月号p22-57で、飛鳥昭雄氏らが、賀茂氏出身のヤタガラスの長老からの情報を得て、「物部氏は徐福とともに来た」という、驚愕の事実を公開している。² しかも彼らは、古代イスラエルの一神教信仰をもつ人々であったようである。

つまり、日本の古神道をもたらした物部集団は、徐福一行に含まれていたということが判明した。物部神道は、日本の神道の本流と考えられるので、神道秘伝をもつ「古史古伝」は、物部氏との繋がりが認められれば、徐福一行と関連すると考えられる。

5. 各古史古伝の由来⁴

(1) 竹内文書

「竹内文書」の原典は、超古代

から存在していたとする、皇祖皇大神宮という宮の神宝であり、成立年代は不明の文書である。この宮の神官を務めていた武内宿禰の子孫・平群真鳥という人物が、漢字仮名交じりに書き改めたという。^{1, 3} 「天神」「上古」「鶺鴒草葺不合(ウガヤフキアエズ)」「神倭」の4時代に分類され、ウガヤフキアエズ朝は73代の天皇が存在していたとされている。

「竹内文書」が世に出たのは1910年で、皇祖皇大神宮が茨城県磯原で再興されたとき、初代管長の竹内宿禰から数えて第66代の竹内巨磨が神宝を公開したのが始まりである。これが昭和11年に皇室に対する「不敬罪」で告発され、最終的には無罪を勝ち取るが、証拠品の神宝は東京大空襲で焼失してしまった。

ここで注目すべきは、武内宿禰は、孝元天皇の子孫といわれ、物部氏を母系の祖にもっている。また、「秦氏の大王」ともいわれる応神天皇の養父(あるいは父親)であることである。つまり秦氏が「竹

内文書」を保管してきていたのだ。尚、数年前イワクラ学会関東支部で東北秋田・田沢湖地方のイワクラ調査を行ったとき、土地の案内者が、巨大龍神を表すイワクラが竹内文書に記載されている通りであり、竹内文書に信憑性があると説明されたことが印象に残っている。

(2) 九鬼文書

「九鬼文書」は、天児屋根命を祖とする中臣家の末裔であり、熊野の別当を務める九鬼家に伝世されていたものと言われ、原典の成立年代は不明である。正式には公開されておらず、戦前に三浦一郎氏によって記された「九鬼文書の研究」がほぼ唯一の史料といわれる。原本の30巻は、「国体・歴史」が3巻で、残りは「中臣神道の神伝秘法」と「兵法・武教」である。この書にもウガヤフキアエズ朝が73代あったことが記されている。この原本は、天児屋根命の時代

に神代文字で書かれたものを、藤原不比等によって漢字に書き改めたという。

天児屋根命は、ニギハヤヒ尊と一緒に、物部氏が高天原から降臨したときのメンバーであり、徐福一行がもたらした文書ということができる。

(3) 富士古文書 (宮下文書、徐福文献)

「富士古文書(宮下文書)」には、ざばり徐福が書き写したことが記載されている。すなわち、神皇第7代孝霊天皇の世73年(前213)、秦の方士徐福率いる85隻の大船団が、紀伊熊野に到着し、天皇が派遣した竹内宿禰を案内者として、富士山麓に落ち着いた。徐福は、富士の皇祖皇大神宮の神官から、神代文字で記された古代記録を見せられ、その内容を漢文で書き写したことから「徐福文献」という名が生じた。

本書は、日本民族の原郷を古代

ユーラシア大陸の中央に置き、その原日本人が日本列島に移動定着してきたこと、王朝交替、異国の侵略、大異変を克服して、神武王朝を成立させるまでの民族古代史を語っている。ウガヤフキアエズ朝は51代つづいたことになっている。

つまり「富士古文書」の初期編纂は、徐福一行によるものであると云える。

(4) 上記(うえつふみ)

「上記」が成立したのは、鎌倉時代初期で、編纂したのは、源頼朝の側近で、豊後国の守護職になった大友能直と言われる。能直は、当時散逸しかかっていた古文献を全国から集め、その集大成として、「上記」を作った。編纂資料には、出雲国造上世紀、伊豆加茂三島伝書、尾張中島逆手記、伊勢度会文、撰津住吉大余座記、豊前後老家文、越白山之舟人文など15種が使われたという。「上記」は神代文字で

書かれている。

「上記」の原本はもともと、大分県臼杵市の大友家に伝わっていたが、1873年の洪水で流失してしまった。ウガヤフキアエズ朝は51代となっている。

大友氏の本貫は、相模の松田で、秦野の波多野氏の分流である。まさに徐福一行の秦氏の後裔が、秦氏に関連する古記を編纂したものである。

(5) 先代旧事本紀

「先代旧事本紀」は、漢文で記されているが、もとの超太古の記録は、神代文字で記されていたという。この書も、ウガヤフキアエズ朝が73代あったと記されている。様々な古史古伝を生みだした源が、実は「先代旧事本紀」であったという説もある。「竹内文書」や「九鬼文書」に登場する神名には、「先代旧事本紀」と近いものが多い。

産業能率大学教授の安本美典氏

によると、「先代旧事本紀」は、編者が物部氏の後裔、興原敏久(別称・物部中原宿禰)であり、823―834年に編集されたと推定されている。⁴

つまり、徐福一行の物部氏が、その一族の歴史を天皇家ではなく、自らの家系からの見方で編纂した家系の文書である。

(6) 秀真伝(ほつまつたえ)

「秀真伝」の編者は、前半の22紋を出雲系の大物主櫛瓊玉命、後半の18紋をその子大直直根子命が担当したという。この2人が「古事記」に出てくる櫛御方命、意富多々泥子と同一人物であれば、その成立年代は崇神天皇の時期までさかのぼる。

「秀真伝」は、極めて神道に関わりの深い古伝書である。陰陽2極の原理で、陽は天と太陽、陰は大地と月ができた。その中間に国常立尊が生まれたという。

また、「秀真伝」では、天孫降臨

が三度あったことになっている。

一度目は、忍穂耳尊の第一皇子の奇玉火明饒速日尊が、日高見高天原から常陸の鹿島へ、そこから海路で、浪速の斑鳩峰に降臨した。

二度目は、忍穂耳尊の第二皇子の仁仁氣根尊が、日高見高天原から筑波山麓の新治の地に降臨した。

三度目は、仁仁氣根尊が、皇子の火火出見を筑紫親王として、九州に下らせ、自身は蓬萊参山(富士山)麓で第二次政庁を開いた。

蓬萊山(富士山)を拠点にした政庁は、「富士古文書」と共通するところがあり、編者が出雲族で物部氏と考えられることから、徐福一行が関与したと考えられる。

(7) 物部文書

「秋田物部文書」は、三河の物部氏が関与しており、ニギハヤヒ命は東北日本海沿岸の「鳥海山」に降臨したことになっている。

「物部文書」が注目されるのは、物部氏が蘇我氏との戦いで敗れ、

「神代の万国史」の写しである「物部文書」をもって、東北地方に逃れたことを、「九鬼文書」に記されていたからである。このとき諏訪に逃れた中臣氏一族が持参した写しの一部が「九鬼文書」で、更に前代の武列天皇の時代に失脚させられた竹内一族(平群真鳥の子孫)が秘匿していた「神代の万国史」の一部(竹内文書)である。

「物部文書」が公開されたのは昭和59年である。天地創成、物部氏の祖ニギハヤヒ命の降臨神話、東国の国譲り、神武東征、蘇我氏との抗争、物部氏の秋田亡命などが記載されている。また「先代旧事本紀大成経」は「物部文書」の一つである。

物部氏が、徐福一行であることが事実であれば、「物部文書」も当然、徐福一行およびその子孫の伝承が記されているものといえる。

物部氏Ⅱ徐福一行が関与していることがわかる。

徐福一行は、その先祖が日本列島で王朝を築いていたことを知り、その拠点である蓬莱山である富士山麓に至り「富士古文書」を編纂した。また、物部氏が「神代の万国史」を持つていたということから、日本の超古代史を述べる「古史古伝」は、ユーラシア大陸から渡ってきた、徐福一行がもたらした可能性が大きい。彼らは、古代イスラエルの石工集団を含み、日本列島各地にイワクラ祭祀場を整えていったと思われる。

参考文献

1. 佐治芳彦…闇の日本史・古史古伝書・英知出版発行、2006・12・20
2. 飛鳥昭雄・三神たける…封印された物部神道・唯一絶対神の信仰を古代日本に持ち込んだ徐福の謎・字研ムー No. 34 4、pp22-45、(2009・(7))
3. 後藤隆…謎の根元聖典・先代旧事本紀大成経、徳間書店発行、2004・10・31
4. 安本美典…奇書・先代旧事本紀の謎をさぐる、批評社発行、2007・05・25

6. まい

主要な古史古伝は、全て秦氏、

了